

飛鳥の神奈備山の比定に関する実景論的考察

藤 田 富士夫

Ⅰ. はじめに

『万葉集』に飛鳥の神奈備山が詠まれている。

故郷を偲ぶ

清き瀬に 千鳥妻呼び 山の際に 霞立つらむ 神奈備の里 (巻7・1125)

「故郷偲ぶ」とは飛鳥旧京のことをいう。歌意は、「清い瀬に 千鳥は妻を呼び 山の間
に 霞が立っていることだろう。飛鳥の神奈備の里では」とされている⁽¹⁾。「神奈備」と
は、「神のいます辺という意味」である⁽²⁾。

この歌は、飛鳥旧京の里人にとって、「神奈備山」は日常の中にある聖なる山であった
ことを示している。これ以外にも「飛鳥の神奈備山」が詠まれた歌は数首ある。その飛鳥
において、『日本紀略』天長六年(829)三月十日条に「大和国高市郡賀美郷甘南備山の飛
鳥社を同郡同郷鳥形山に遷す。神の託宣に依るなり」とあるように、平安朝以降に新たに
鳥形山が飛鳥のカムナビに比されたことが分かる。現在、奈良県明日香村の鳥形山には
飛鳥坐あすかにいます神社が鎮座している。遷宮以降それまでの「甘南備山の飛鳥社」の祭祀が薄らい
だらしく、今日、『万葉集』に歌われた「飛鳥の神奈備山」の所在が分からなくなっている。

筆者は、先に『万葉集』「立山賦」の景を解するに際して、「飛鳥の神奈備山の景」を探
索したことがある⁽³⁾。その時には漠然とした見通しはあったものの論述するには至らな
かった。その後、幾度か現地踏査を行い、ここに実景論的視座から“飛鳥の神奈備山”の
比定が可能となった(第1図)。その構想について述べてみたいと思う。

Ⅱ. 所在に関する主な研究

「飛鳥の神奈備山」の所在地について諸説が呈されている(第2図)。

まず、近世以来の通説であり澤瀉久孝氏等が採る「雷丘説」がある⁽⁴⁾。近年の発掘調
査によって飛鳥宮跡が伝飛鳥板蓋宮跡に比定され、やや離れた地点にある「雷丘」は宮跡
からの見通しが悪いことなどから否定されている⁽⁵⁾。

また、折口信夫氏や直木孝次郎氏等による「甘樫丘説」がこれまで有力視されてきたが⁽⁶⁾、
麓や山腹に蘇我蝦夷や入鹿の邸宅があったとされ、発掘調査で遺構が検出されるなど神奈

備山（神のいます辺）とするには違和感があり支持する見解が広がっていない。

このような中で提論されてきたのが「南淵山説」や「ミハ山説」である。

「南淵山説」は桜井満氏によって提論された。『日本書紀』天武天皇五年（676）五月に、「南淵山・細川山を禁めて、並びに^{いさ}葛^{くさかりたきぎこ}薪ること莫れ。…」とする勅があることに着目し、南淵山は神奈備の「聖地」であったとする。細川川（冬野川）の上流にある多武峯や稲淵川（南淵川）を遡って至る吉野は神仙境である。それから流れ下る両河川の聖水を帯にして南淵山があるのだという。川が合流するところが^{いわいど}祝戸（地名）であり、そこは神仙境への門戸であり禊の聖地であったとする。故に、ここからの南淵山が飛鳥の神奈備山であったと説いている（写真1）。

けれども、その景は一般的に認識される三角形をした神体山の山容を示していない。このことについて桜井氏は、「必ずしも円錐形の山であることが条件ではない。神奈備山として名だたる三輪山はみごとな円錐形の端山であるが、神祭りの山は天の香久山のように端山であることこそ必須の条件であろう」としている⁽⁷⁾。



第1図 主な踏査地（○数字は写真番号）



第2図 飛鳥の神奈備山の比定地（諸説による）



第3図 三輪山の地形図

しかしながら飛鳥時代の神奈備山は、神道考古学を創始した大場磐雄氏が説くように、「三輪山型」を基本とするのは考古学の常道である⁽⁸⁾。

さらには「飛鳥の神奈備山」と「天の香久山」とを同列に扱うことには賛同できない。上野誠氏は、藤原京や平城京は大和三山（天香久山、畝傍山、耳成山）と吉野の山を鎮とした新たな地相観に基づく宮都であるとし、「藤原京を『交』として、カムナビから三山へと、宮都を守る山岳が変化する」「カムナビから三山へという起伏、あるいは消長がある」と整理している⁽⁹⁾。

このようなことから、飛鳥の神奈備山は一般論に沿って三角形を示す山容に求めるのが妥当と思われる。もし、かかる姿形を南淵山に求めるとすれば、後述するミハ山の南西側に位置する棚田の上方から見た景が整っている（写真2）。この景は時折、解説書で飛鳥の聖性を語るときに用いられることがあるが、それは神奈備山とは異次元のものである。この景地は「飛鳥の宮」から離れていて本稿での検討にはなじまない。

さて、今日多くの研究者が支持しているのが「ミハ山説」である。岸俊男氏によって1971年に提論されたのを嚆矢とする⁽¹⁰⁾。橘寺の南方に「ミハ山」の小字を有する山（標高216m）があることに注目し、ミハ山とは神山のことであり、そこはまた中ツ道の延長線が突き当たる地点であると説いた。中ツ道とは、奈良盆地を南北に走る古代の三幹線道路、上ツ道・中ツ道・下ツ道のうち、基準となる中ツ道のルートを言う。藤原京の左京四坊端を規定している幹道としても知られている。

千田稔氏は岸説を敷衍して、中ツ道は正確に「ミハ山」に達するとし、「その基点は飛鳥のカムナビである『ミハ山』であった」としている⁽¹¹⁾。また、和田萃氏はミハ山に加えて、その東に峯続きにあるフグリ山に磐座遺構があり、その裾を飛鳥川が帯のごとくに流れていることや、祝戸の地名があることに注目する。これらから当地域が信仰の対象となっていたとして「ミハ山説」を補強している⁽¹²⁾。

さらに西宮一民氏は、『万葉集』巻13・3230歌に注目する。そこには「幣帛を 奈良より …（略）…石橋の 神奈備山に …（略）…」とある。「石橋」は「打橋」とは対にある用語（巻2・196）で、それは飛鳥川上流に渡したものであると説く。上流にはミハ山がある。故に「ここに岸説『ミハ山』が動かぬものとして浮かび上がってくるのである」と説いている。あわせて、ミハ山を伝飛鳥板蓋宮跡から眺望した時の山容などから、「ミハ山説」を支持している⁽¹³⁾。

このように「ミハ山説」は、古代史や万葉学の研究者が支持しており定説化の勢いにある。しかし、これらの論には考古学が常道とする神体山研究からの視点が希薄であるように思われる。大場磐雄氏が説く「三輪山型」の検討を外しての論は説得力を欠いている。

ちなみに飛鳥の宮として研究者に共通認識されている史跡・伝飛鳥板蓋宮跡やその近域

からの「ミハ山」の景は三輪山と対比できるような三角形の山容を成していない（写真3・4）。深い解析谷で刻まれた複数の山が横たわっているだけで、ミハ山（写真中央に所在）はやや先鋭な頂きを有しているが、特に目立つ山ではない。

それでもと探索すると、祝戸地内の上居橋辺りからはミハ山尾根の東端（正確にはフグリ山を指す）が整美な三角形を成すのを見ることが出来るが（写真5）、この地点は伝飛鳥板蓋宮跡からは奥まった場所にあるので成立の余地はない。

筆者にはミハ山の山容から飛鳥を統べる神奈備山の神威を感じる事が出来ない（写真6）。これまでも「ミハ山説」について否定的に見る所見がある。ミハを「神山（ミワヤマ）」に通じるとする点について、ミハとミワは仮名遣いが異なるといったことから疑問が呈されている⁽¹⁴⁾。「ミハ山」の小字が、飛鳥時代からの遺称を前提としていることも気になる。隣接する「フグリ山」の呼称などに新しい響きを覚えるからである。

今日、加えて「ミハ山説」を支えてきた中ツ道の延長説が揺らいでいる。井上和人氏が、「中ツ道の検証」を明日香地域の発掘調査の成果などを基に子細に行った結果⁽¹⁵⁾、「中ツ道そのものが藤原京域の香久山以南や石神遺跡付近では存在しないことが明らかとなり、直線道として飛鳥を抜けている可能性は少なくなった」とされている⁽¹⁶⁾。「中ツ道」の飛鳥における存在そのものが否定されているのが考古学者からの所見である⁽¹⁷⁾。

このように「ミハ山説」の成立には難点があると思われる。

III. 飛鳥の神奈備山を求めて

(1) 三輪山をモデルとして

飛鳥の神奈備山を比定するに先立って、神奈備山の姿形とはどのようなものであるかを『万葉集』で確認しておきたい。次は、異論が存しない「三輪山」の歌である。

○三諸の その山並に 児らが手を 巻向山は 継ぎの宜しも（巻7・1093）

○三諸つく 三輪山見れば こもくりの 泊瀬の檜原 思ほゆるかも（巻7・1095）

大神大夫、長門守に任せらるる時に、三輪川の辺に集ひて宴ずる歌〔二首〕

○三諸の 神の帯ばせる 泊瀬川 水脈し絶えずは 我忘れめや（巻9・1770）

この歌（巻9・1770）を詠んだ「大神大夫」とは、三輪朝臣高市麻呂のことであり、大神は大神神社の祭神大物主神の子孫とされている。これらが示す「三諸」は、三輪山を指している。上野誠氏は、『万葉集』の中で単独で「三諸」と表現されている場合には三輪



写真1 祝戸から見た南淵山の景
(2013年2月4日)



写真2 ミハ山の南西(棚田)から見た
南淵山の景(2013年2月4日)



写真3 伝飛鳥板蓋宮跡から見たミハ山の景
(2013年2月4日)



写真4 高市橋から見た飛鳥川とミハ山の景
(2013年2月4日)



写真5 祝戸から見たミハ山(フグリ山)
の景(2012年11月16日)



写真6 上居から見たミハ山の景
(2013年4月4日)



写真7 桜井市栗殿から見た三輪山
(初瀬川)(2012年11月16日)



写真8 桜井市栗殿から見た三輪山
(2012年11月16日)



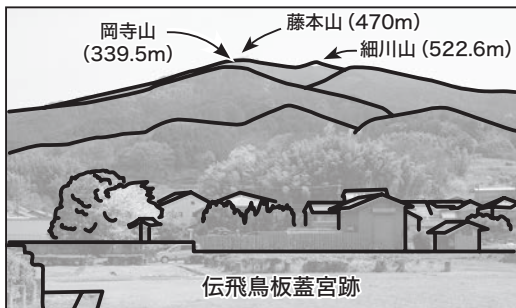
写真9 伝飛鳥板蓋宮跡から東方を見る
(2013年2月4日14:05)



写真11 伝飛鳥板蓋宮跡から神奈備山を仰ぐ
(2013年2月4日14:12)



写真12 晴天の日に伝飛鳥板蓋宮跡から見た
東方の山景 (2013年4月4日)



(写真12の山景解説)



写真10 伝飛鳥板蓋宮跡から東方を見る (2013年2月4日14:11)
—春霞の中から神奈備山(岡寺山)が姿を現した—

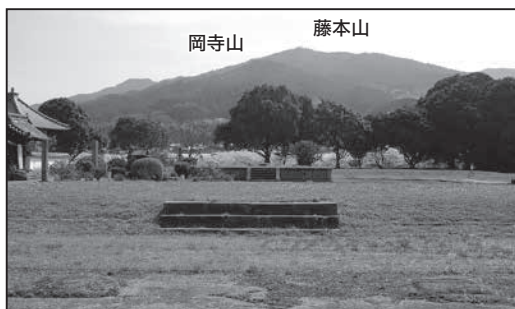


写真13 川原寺から見た東方山景
(2013年4月4日)



写真14 川原寺の南門前（東西道路）から
見た東方山景（2013年4月4日）



写真15 橋寺から見た東方山景
(2013年4月4日)



写真16 飛鳥京跡苑池から見た山の景
(2012年11月16日)



写真17 小原の里から見た岡寺山
(2013年4月4日)



写真18 島ノ庄から見た岡寺山
(2013年4月4日)



写真19 稲淵から神奈備山（岡寺山）を見る
—集落は祝戸—（2013年4月4日）

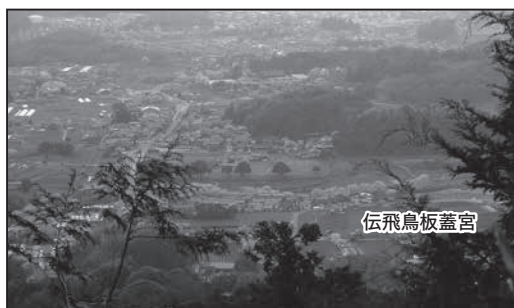


写真20 神奈備山（岡寺山）から見た飛鳥
古京の景（2013年2月4日）

山を指し、「三諸の神」は「三輪山の神」のことで、「三諸の 神の帯ばせる 泊瀬川」(巻9・1770) というのは、三輪山の神が泊瀬川を帯にしている表現であるとしている⁽¹⁸⁾。

三輪山(469m)は、奈良県桜井市に所在し^{おおみわ}大神神社境内を成している(第3図)。神道考古学を提唱した大場磐雄氏が、『出雲国風土記』などの古典に見える神奈備13例中で、「古来最も顕われているのは三輪の神奈備すなわち三輪山である。大和平野の東辺にその秀麗な姿を示して、今も昔ながらの山そのものを御霊代としていることは、あらためて説くまでもあるまい」と讚美し、三輪山の「典型的な笠状円錐形」の山容をもって「神奈備」研究の標式としたことでも知られている⁽¹⁹⁾(写真7・8)。

かかる三輪山の祭祀の始まりを総論した和田萃氏は、考古学者の寺沢薫氏による論文「三輪山の祭祀とそのマツリ」の成果を引用し、「三輪山祭祀は、五世紀に三輪山を仰ぎ見る水垣郷(初瀬川と巻向川に挟まれた地域)で開始され、六世紀になると禁足地を中心とした地域に収斂していった」としている⁽²⁰⁾。

三輪山が「三諸」と称されてきた始まりが5世紀にさかのぼることに留意したい。

次に、飛鳥の神奈備山の歌を見ておきたい。

○葦原の 瑞穂の国に 手向すと 天降りましけむ 五百万 千万神の 神代より 言ひ継ぎ来たる 神奈備の 三諸の山は 春されば 春霞立ち 秋行けば 紅にほふ 神奈備の 三諸の神の 帯にせる 明日香の川の 水脈速み 生しため難き 石枕 苔生すまでに 新た夜の 幸く通はむ 事計り 夢に見えこそ 剣大刀 斎ひ祭れる 神にしまさば (巻13・3227)

○春されば 花咲きををり 秋付けば 丹のほにもみつ 味酒を 神奈備山の 帯にせる 明日香の川の 速き瀬に 生ふる玉藻の うちなびく 心は寄りて 朝露の 消ぬべく 恋ひしくも 著くも逢へる 隠り妻かも (巻13・3266)

○三諸の 神奈備山ゆ との曇り 雨は降り来ぬ 天霧らひ 風さへ吹きぬ 大口の 真神の原ゆ 思ひつつ 歸りにし人 家に至りきや (巻13・3268)

[巻13・3227]の「三諸」は、「カムナビ+ノ+ミモロ」とあるので、単独形で表現される場合の「三輪山」とは区別することができる。ここでは「明日香の川」とあるので「三諸の神」とは飛鳥の神奈備山のそれを指すのは間違いない。ヤマトの地域にあって、恐らくは飛鳥宮の成立に先立って5世紀代に成立したのが三輪山祭祀であったとできよう。そ

の三輪山が「三諸の山」と歌われていて、同じく飛鳥の神奈備山も「三諸の山」として出てくる。上野誠氏によれば、「ミモロ」と称されている場所は、大和国では飛鳥のカムナビ（6例）、三輪山（7例）、春日野（1例）と、山背国の鹿脊山（1例）があるとされる⁽²¹⁾。

飛鳥の神奈備（巻13・3227）と三輪山（巻7・1095）とが共に「三諸」で称えられている点に注目したい。かつ、三輪山祭祀が先行（5世紀代に成立）しているかのようである。飛鳥の神奈備山は、三輪山に倣って「三諸」と称えられた可能性を考えたい。直截に言えば、三輪山をモデルとして飛鳥の神奈備山が比されたと言えるのではないだろうか。

（2）飛鳥の神奈備山を比定する

飛鳥の神奈備山の比定について、「ミハ山説」に押されて注目度が低いが「岡寺山説」（標高339.5m）がある。伊藤高雄氏が最初に「飛鳥岡」の中心を成すと指摘した山で、岡寺（史跡・岡寺跡）の境内地の後背にある頂きを指す⁽²²⁾。同氏は、岡寺の法号である龍蓋寺の伝承が水の信仰をもって当地域が聖域と考えられること、岡寺山の北西麓に山の木を伐った場合に禁忌伝承が伴うこと、岡のムラの人々が継承する歳時暦と植物利用に関する自然暦などが万葉歌を反映していること、大字岡では「雲が二上山の方へ走ると雨風になる」、「雲が西向いたら風が吹く」と伝えられていて『万葉集』巻13・3268の情景に合うことなどから、岡寺山こそが飛鳥の神奈備山に相応しいとした。

また黒崎直氏は、亀形石や酒船石遺跡の立地を検討する中で岡寺山（氏は「標高約460m」と記している）に注目している。三角形の山は「甘南備山」と呼ばれるとし、考古学的な視角から述べている。ミハ山は目立たない山であるとして否定的である。氏の見解に賛意を表したい。ただし、同氏は伊藤高雄氏が示された岡寺山（標高339.5m）とは異なる山を「神奈備山」に比定している。示された標高や写真から判断する限り、それは万葉展望台が所在する通称・藤本山を頂点とした景を想定されているようだ。

筆者は伊藤高雄氏が示す「岡寺山説」を支持するものである。混乱を避けるため多武峰から西に派生した支脈の名称を整理しておきたい。拙稿で関係するのは岡寺山、藤本山、細川山といった3つの山である。岡寺山（標高339.5m）については伊藤高雄氏が述べている⁽²³⁾。藤本山（標高470m）と細川山（標高522.6m）については、森斌氏が万葉故地の視点から現地踏査を行っている⁽²⁴⁾。両氏の現地比定に従いたい。

次に、筆者が実景観測したところを記しておきたい。

※2013年2月4日の明日香村は朝から霧で霞んでいた。伝飛鳥板蓋宮跡の前面（ここでは東側）に、いつもは見えている細川山山系や藤本山の峰々の姿はなかった。14時05分、手前の低山の視界がいくらか良くなってきた（写真9）。14時11分、突如としてその奥に

たたずむ山系が見えてきた。たちまちに三角形を成す神奈備型の山容が立ち上がってきた（写真10）。岡寺山が単独で現れたのである。その姿形は14時13分頃まで確認できた。まさに三輪山の景を想わせるものであった。この直後、背後の多武峰の稜線が浮かび上がってきて岡寺山は目立たなくなってしまう。3～4分間の短いショーであったが（写真11）、地元の人々にとっては条件を整えばいつでも見えている光景であろう。その後、一気にガスが散って、そこに普通に横たわっている見慣れた山容（写真12）が展開した。伝飛鳥板蓋宮跡から仰ぎ見る東方山域のピークは「万葉展望台」の後方の「藤本山」（標高470m）である。『万葉集』（巻7・1330）に出てくる“細川山”（標高522.6m）は藤本山の頂をさらに東方へ約450m這入りこんだピークを指すので、ここ伝飛鳥板蓋宮跡からは望むことはできない⁽²⁵⁾。

ここで伝飛鳥板蓋宮跡（飛鳥宮跡）から望める藤本山と岡寺山との関係について述べておきたい。藤本山と岡寺山とは稜線が一部重なり植生も同一性を成している。このため通常は、背後にある藤本山に岡寺山が埋没していて、ある程度意識しないと岡寺山は浮かび上がってこない。このことが飛鳥の神奈備山に対する直截な遺称地を含めて今日的認識が失われた理由の一つと思われる。

岡寺山は写真10・11のように現れた。これは三輪山の写真7・8と比較すれば一目瞭然、同一の姿形を成している。規模は第2図・第3図で示したように裾幅が2～3kmと広がっていて威容を呈する。『万葉集』に歌われた初瀬川（巻9・1770）や明日香川（巻13・3227、3266）が「三諸の神」を帯にするとといった形容も同一の形状（大きく「く」字状）で展開している⁽²⁶⁾。

加えて、三輪山（標高469m）と大神神社（約100m）の比高差は約369mである。岡寺山（339.5m）と飛鳥宮跡に比定される伝飛鳥板蓋宮跡（約122m）との比高差は約217.5mある。岡寺山は三輪山に比していくらかは低位ではあるが裾幅が少し狭い。いわば三輪山を一回りコンパクトにした整美な神体山の威容を成している。このようなことから筆者は岡寺山こそが『万葉集』に歌われた「飛鳥の神奈備山」であったと想定している⁽²⁷⁾。

かかる岡寺山は、川原寺や東西道路（後述）や橘寺近域からは、藤本山と稜線の一部が重なりはするが、三角形の独立峰を真正面から見るができる（写真13～15）。一方で、飛鳥京跡苑地遺跡からは藤本山だけが顕著に際立って見える（写真16）。岡寺山は、飛鳥坐神社近くの小原里（写真17）や島ノ庄（写真18）、そして仙境吉野への通路となる稲淵（写真19）から見ると、藤本山とは独立した（実際は尾根続きではあるが）山容を示している。このような景は、当然、飛鳥時代の人々に認識されていたものである。要するに、“飛鳥の神奈備山”は独立峰の、伝飛鳥板蓋宮跡や東西道路近域からの遥拝を旨と

した神体山であったことが知られるのである。冒頭に記した『万葉集』「神奈備の里」(巻7・1125)は、この辺りに展開していたであろうと思われるのである。

(3) 岡寺山の歴史地理的風景

江戸時代に、岡寺を参詣した人々が岡寺山の尾根を伝って多武峯へ向かう近道として利用した「旧多武峯街道」が存続した。北麓に位置する東山と、南麓に位置する岡や上居から藤本山へ登る2本のルートがあった。藤本山で合流し細川山を経て多武峯、談山神社へと至る⁽²⁸⁾。これを基として今日の多武峰への散策道が整備されている。踏査では、岡寺山へ登るに際して岡・上居ルートを用いた。上居地区が管理する溜池「平尾池」まで道路がついている。ここから先は、道は無いが急斜面を15分ほど直登すれば頂上に出る。

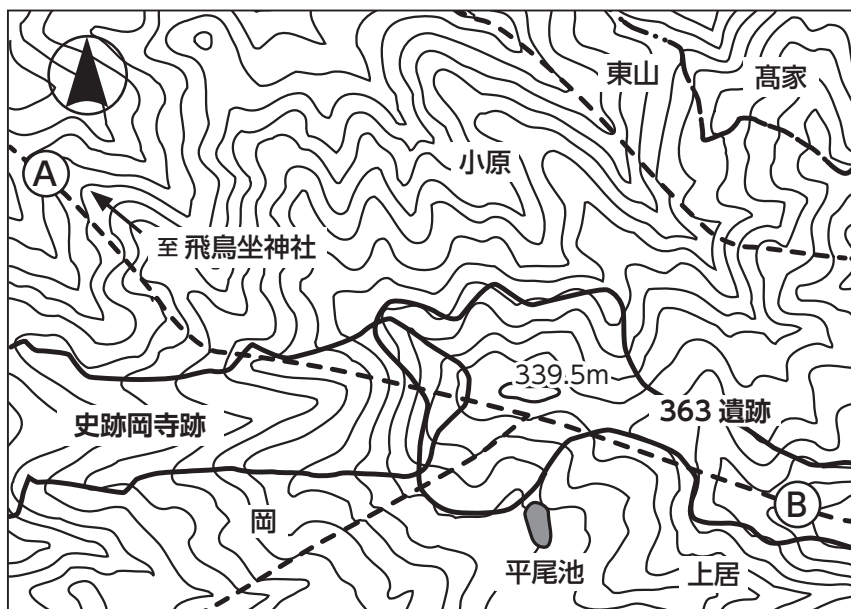
頂上には倒木の間に野竹が密生していて視界や行動を制限される。南北方向に尾根を断ち割った堀切状遺構がある。一辺が20mほどの台状地形を成している。『奈良県遺跡地図Web』(樫原考古学研究所)によれば頂上直下の西域には「史跡岡寺跡」、頂上から藤本山にかけては「363遺跡・多武峰城塞跡岡道地区」が記されている。堀切状遺構は中世のものであろう。頂上は中世に改変されている可能性がある(第4図)。

密生した野竹の間からかろうじて明日香村を見おろすことが出来た。伝飛鳥板蓋宮跡を眼下にし、川原寺や橘寺、甘樫丘を一望にすることができる。金剛山や二上山も遠望できる。ここからの眺望は、今日「万葉展望台」として整備されている藤本山よりは伝飛鳥板蓋宮跡をより身近に感じることができる(写真20)。藤本山では、伝飛鳥板蓋宮跡との距離観がある。これは両方の地点に立って見てはじめて実感できる感想である。

後述するが、山部赤人に神岳に登ったときの歌がある(巻3・324)。その視界は、このようなものであっただろう。

なお、岡寺山へのルートについて東山地域からのアプローチが気になる。藤本山への「旧多武峯街道」の起点が東山であり、そこから分岐する山道の存在が当然予想される。東山散策道の途中から岡寺山へアプローチしたがブッシュに阻まれて実現しなかった。

地図(『マピオン地図 明日香村』)を見ると岡寺山の頂上付近は、小原、岡、上居の3地域の大字境界を成している(第4図)。特に頂上の大半や北半は「小原」に属している。かかる小原割のラインを追って下れば、酒船石遺跡や飛鳥池工房遺跡の東側に位置する斜行道へと連なり「小原の里」へと至る。かかる斜行道の先には、天長六年に神奈備山から鳥形山に飛鳥社を遷したとされる「飛鳥坐神社」が鎮座している(第5図)。近域からは岡寺山が三角形の威容を展開しているのを望むことが出来る(写真17)。このルート(いまだ踏査していないが字境に沿った尾根道が予想される)は岡寺山と飛鳥坐神社との密接な関係を示しているであろう。



第4図 岡寺山の遺跡など
 (363遺跡=多武峰城塞跡岡道地区 一 一 は大字境界の略線・AとBラインは小原の南域)



第5図 岡寺山をめぐる大字割 (一 一 は境界・マピオン地図を参考に作成した)

IV. 飛鳥の神奈備山をめぐる

(1) 神奈備山への意識

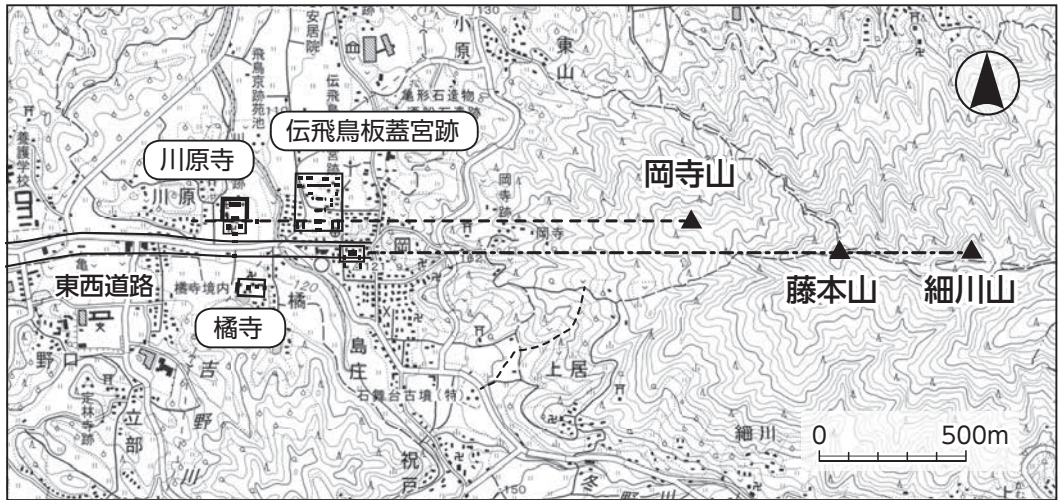
これまで筆者は伝飛鳥板蓋宮跡から見た神奈備山の景にこだわってきた。当地には飛鳥の中心となる宮が集中しており、神奈備山への祭祀は王権の儀礼と深く関わっているからである⁽²⁹⁾。明日香村の「伝飛鳥板蓋宮跡」は、正確に言えば三層から成っている。下層の第Ⅰ期遺構は舒明朝「飛鳥岡本宮」、中層の第Ⅱ期遺構は皇極朝の「飛鳥板蓋宮」、上層は二分され古い第ⅢA期遺構は斉明朝の「後飛鳥岡本宮」で新しい第ⅢB期遺構は天武・持統朝の「飛鳥浄御原宮」に比定されている。現地を引く整美な石敷き井戸はⅢ期遺構に属する⁽³⁰⁾。さて、飛鳥の神奈備山はいつ頃から意識されたのであろうか。

第Ⅰ期の「飛鳥岡本宮」は北から西に約20度振れて建築されている。これについて酒井龍一氏は、推古朝の「斑鳩一太子道（筋違道）—飛鳥」を結ぶ“推古朝の都市計画”の枠組みの中で説明できるとしている⁽³¹⁾。かかる飛鳥岡本宮と神奈備山（岡寺山）との関連は不分明である。

次いで、第Ⅱ期遺構の段階を迎える。「飛鳥板蓋宮」である。この王宮は飛鳥地域で方位を初めて正方位にとることで知られている。以降、飛鳥宮第ⅢA期遺構や第ⅢB期の遺構はそれを継承している。留意したいのは第Ⅱ期遺構である。発掘調査で東西約190m、南北約198m以上の掘立柱塀や回廊状の区画施設が方形に廻っていることが確認されている。南端では東西に走るSA7913（築地・塀）やSD7914（溝）によって区画されている⁽³²⁾。このラインを東に延長すればほぼ正しく岡寺山の頂を指している（第6図）。かかる外域施設の方向が神奈備山といかなる関係性を有するかについて妙案はもたないが、さりとて看過するには惜しい。あるいは黒崎直氏が説く、飛鳥の方形地割の5分の1里方眼（約106m）のラインに偶然乗った結果かもしれない⁽³³⁾。

かかる懸念はあるが神奈備山との関係性の観点から、仮説として皇極天皇の飛鳥板蓋宮（643年造営）は飛鳥の神奈備山を意識して造営された可能性を呈しておきたい。また、明日香村川原の川原下ノ茶屋遺跡で幅約12mの東西道路が確認されている。この道路跡は亀石遺跡や川原寺の南門と橘寺の北門との間でも見つかっており⁽³⁴⁾、その延長は伝飛鳥板蓋宮跡のエビノコ郭の西門付近に至っている。敷設は天武朝で廃絶は藤原宮期と、存続期間は幹路の割には意外と短かったとされている⁽³⁵⁾。

この堂々たる大路の延長線は藤本山や細川山の頂を指している。今後の課題となるが、飛鳥宮最終段階に至って飛鳥の神奈備観が広域化した可能性も視野に入れておきたい。



第6図 宮跡の真東に位置する岡寺山など

(2) 神奈備山へ登る人々

飛鳥の神奈備山は、時にはヒトの登拝を許す山であった。『万葉集』に次の歌がある。

神岳に登りて、山部宿禰赤人が作る歌一首〔并せて短歌〕

○みもろの 神奈備山に 五百枝さし しじに生ひたる つがの木の いや継ぎ継ぎに
玉葛 絶ゆることなく ありつつも 止まず通はむ 明日香の 古き都は 山高み 川と
ほしろし 春の日は 山し見が欲し 秋の夜は 川しさやけし 朝雲に 鶴は乱れ 夕霧
に かはずは騒ぐ 見るごとに 音のみし泣かゆ 古思へば (巻3・324)

反歌

○明日香川 川淀去らず 立つ霧の 思ひ過ぐべき 恋にあらなくに (巻3・325)

この歌の「明日香の 古き都は」、「天武・持統両天皇の皇宮清御原宮の跡を中心としている」とされている⁽³⁶⁾。上野誠氏は、長歌冒頭の「みもろ(三諸)の神奈備山」が、題詞にあるように「神岳」と呼ばれていたことが知られるのであるとし、「少なくとも奈良朝後半において〈飛鳥のカムオカ=飛鳥のカムナビ〉とみる考え方が、存在していたことは確認できる」としている。そして、この歌は奈良朝おそらくは聖武朝における古代追憶の情を述べた作品であると説いている⁽³⁷⁾。少なくとも奈良朝において、飛鳥の神奈備山の聖性が意識されていたことがうかがえる。

他方、不純な意図をもって登山する人がいた。『日本書紀』天武天皇四年(675)十一月三日の記事に、「十一月の辛丑の朔にして癸卯に、人有りて宮の東の岳に登り、妖言(古訓-オヨヅレゴト)して、自ら芻(くびは)ねて死ぬ。是の夜の直に当れる者に、悉

くに爵一級を賜ふ」とある⁽³⁸⁾。

これについて『新編日本古典文学全集4 日本書紀③』の頭注は、「妖言をして自殺したのだから、発言者は決死の覚悟であったとすると、おそらく皇居間近の丘上から大声で政治批判を行ったというようなことが想像できる」とし、「宮の東の岳」については「酒船石のある南北に連なる丘陵をさすか」としている。それにしても、自死させた宿直者に褒美として爵位が成された、というのは決して軽い事件であったとは思えない。

この記事は「宮の東の岳」とだけ記す。山部赤人は神奈備山を「神丘」と記す。これが同一のものを指すとすれば面白い。けれども記事では判断できない。天武朝における「飛鳥浄御原宮」は「飛鳥宮のⅢ－B期の遺構」で示されていることに留意したい⁽³⁹⁾。そこに立って見れば「宮の東の岳」は直ぐに了解できる（写真10）。真東に岡寺山（神奈備山）が直視できるのである。ここでは「宮の東の岳」とは飛鳥の神奈備山を指すと理解しておきたい。すなわち神奈備山を舞台にした妖言であつたから大事件につながったと推定したのである。ところで「妖言」（およづれごと）とは何であろうか。

石田王の卒りし時に、丹生王の作る歌一首〔并せて短歌〕

○なゆ竹の とをよる御子 さにつらふ 我が大君は こもくりの 泊瀬の山に 神さ
びに 齋きいますと 玉梓の 人そ言ひつる 逆言（およづれ）か 我が聞きつる 狂言
（たはごと）か 我が聞きつるも 天地に 悔しきことの 世の中の …（略）… （巻
3－420）

反歌

○逆言の 狂言とかも 高山の 巖の上に 君が臥やせる（巻3－421）

○狂言（たはごと）か 逆言（およづれごと）か こもりくの 泊瀬の山に 慮りせり
と言ふ（巻7・1408）

このように『万葉集』に3首見える「逆言－およづれごと」は、「狂言－たはごと」と対で歌われ、いずれも石田王の葬地（巻3－420、421）や挽歌（巻7・1408）の舞台としての「泊瀬の山」を詠みこんでいる。かかる用例から類推すれば、天武紀に記された「妖言」は『新編日本古典文学全集4 日本書紀③』の頭注が記すような“決死の覚悟”とか“政治批判”などといった凛々しさを伴った解釈は現代的に過ぎるようだ。政治批判と言うよりは、例えば、天皇の死とも関わる不吉な言葉を発するなどが「妖言」であったのかもしれない。かかる妖言者が「是の夜の直に当たれる」とあることから夜間に神奈備山へ登っているのである。「神が示現して力を発揮するのは夜のことであった」とか⁽⁴⁰⁾、

「夜は、神の世界を本質とするから、人間にさまざまな障りをもたらす神的・靈的なモノたちの跳梁する時間でもあった」とされている⁽⁴¹⁾。

かかる妖言者は、この点においても禁忌を犯しているのである。類推を重ねるが妖言者は、神威に当たって「自ら刎ねて死」したことで事件は終息したと見ればどうであろうか。

神奈備山の聖性と権威が汚されることなく維持されたのである。「宿直者」への爵位はかかる功績からのものであったのかもしれない。

V. おわりに

本稿では、諸説ある「飛鳥の神奈備山」のうち実景論的立場から伊藤高雄氏による岡寺山説がもっとも相応しいとした。神体山として典型的な三輪山をモデルとして、その姿形を重ねての比定である。出来るだけ現地の景に従い、当時（飛鳥時代）の神体山観のなかで理解しようと努めたつもりである。岡寺山は、これまで日常の風景の中にあまりにも溶け込んでいたために注目度が低かったものと思われる。溶け込んでいるが故に筆者はなおさらに、当地に「神奈備の里」の新たな原風景を感じるのである。

これまで岡寺の山腹や麓の丘陵では亀形石遺跡や酒船遺跡などが注目されており、当地が聖水や聖地と関わる「飛鳥岡」として論じられてきた。それらは岡寺山が飛鳥の神奈備山であれば、一体感のある「飛鳥岡」の空間として無理なく認識出来るところとなる。

重論するが、これまで有力視されてきた「ミハ山」は、「飛鳥岡」とは飛鳥川を挟んだ対岸に位置し、かつ三輪山と比べて、まったく神体山の体裁を成していない。王権の儀礼と深く関係したであろう飛鳥の神奈備山は、やはり三輪山と同様に壮大で整美な「岡寺山」であったに違いない。

本稿が、飛鳥の神奈備山と飛鳥岡をめぐる論について、いくらかなりとも寄与するところがあれば嬉しい。冒険や推論を重ねた箇所も多く、すでに解決済の課題や基本的文献の遺漏もあると思われる。これらについて識者のご教示ご批正を賜れば幸いである。

註

- (1) 小島憲之、木下正俊、東野治之校注・訳『新編日本古典文学全集 7 万葉集②』小学館 2006年、201頁。以下、本稿での『万葉集』は『新編日本古典文学全集 6～9』小学館に依る。
- (2) 上野誠「かむなび（神奈備）」『万葉ことば事典』大和書房 2001年、152頁
- (3) 藤田富士夫「万葉集『立山賦』の『帯ばせる』景に関する実景論的考察」『人文社会科学研究所年報』No.11 敬和学園大学 2013年、145～162頁
- (4) 澤瀉久孝『萬葉集注釋卷第十三』中央公論社 1969年版、23頁
- (5) 神野富一「神岳」『續明日香村史 中巻』明日香村 2006年、298～300頁
- (6) 折口信夫「かみをか〔神岳〕」『折口信夫全集 第六卷 萬葉集辭典』中央公論社 1966年、120～121頁。直木孝次郎『飛鳥—その光と影—』吉川弘文館 1990年、104～115頁。神野富一「神岳」『續明日香村史 中巻』明日香村 2006年、298～300頁など。
- (7) 桜井満「第一章 飛鳥の風土—飛鳥の川と神奈備の山—」『飛鳥の祭りと伝承』桜楓社 1989年、23頁。同『万葉集の民俗学的研究』おうふう 1995年、404～410頁
- (8) 大場磐雄『祭祀遺跡—神道考古学の基礎的研究—』角川書店 1978年版、19～21頁
- (9) 上野誠『古代日本の文芸空間—万葉挽歌と葬送儀礼』雄山閣 1997年、59～60頁
- (10) 岸俊男「万葉集の歴史的背景」『文学』vol.39 岩波書店 1971年、79～82頁。同「古道と宮都」『日本古代史の謎再考』学生社 1994年、156頁。同『宮都と木簡』吉川弘文館 1977年、198～204頁（1971年論文の再録）。
- (11) 千田稔「3都城選地の景観を視る」『日本の古代9 都城の生態』中央公論社 1987年、115～122頁。同「2 飛鳥という土地とそのいわれ」『飛鳥・藤原京の謎を掘る』文英堂 2000年、216頁
- (12) 和田萃「飛鳥岡について」『橿原考古学研究所論集 創立三十五周年記念』吉川弘文館 1975年、605～609頁。同『図説 飛鳥の古社を歩く—飛鳥・山辺の道—』河出書房新社 2007年、25～27頁
- (13) 西宮一民『上代の和歌と言語』和泉書院 1991年、125～157頁
- (14) 井村哲夫「四 飛鳥の古き京師」『續明日香村史 中巻』明日香村 2006年、259～260頁
- (15) 井上和人『古代都城制条里制の実証的研究』学生社 2004年、26～34頁
- (16) 林部均『飛鳥の宮と藤原京—よみがえる古代王宮—』吉川弘文館 2008年、172頁
- (17) 黒崎直『日本史リブレット71 飛鳥の宮と寺』山川出版社 2007年、96～98頁
- (18) 註9、71頁
- (19) 註8、19～21頁
- (20) 寺沢薫「三輪山の祭祀遺跡とそのマツリ」『大神と石上—神体山と禁足地—』筑摩書房 1988年、37～74頁。和田萃『古代天皇への旅—雄略から推古まで—』吉川弘文館 2014年、175頁。和田萃「6 三輪山の神々と周辺の神々」『古代ヤマトと三輪山の神』学生社 2013、124～153頁
- (21) 上野誠「みもろ（三諸）」『万葉ことば辞典』大和書房 2001年、374～375頁
- (22) 伊藤高雄「岡・島ノ庄」『飛鳥の祭りと伝承』桜楓社 1989年148頁
- (23) 註22に同じ。
- (24) 森斌「二十 細川と細川山」『続明日香村史 中巻』明日香村 2006年、326～328頁
- (25) 『明日香村全図』（昭和46年測量、2500分の1・10000分の1）では339.5mが頂上に記されている。伊藤高雄氏による岡寺山の標高は、それに基づいている。岡寺山からの尾根筋の頂きには、岡寺や小原から散策道が整備され容易に登ことができる「万葉展望台」がある。ここは飛鳥一番の展望台と称されるように、眼下には飛鳥宮を見、遠くは西の金剛山や葛城

山、二上山が望める。ピークはここよりさらに東側に位置するが明日香村一円からはこの展望台がピークであるかのように見えている。展望台には、「藤本山 標高470メートル」の標柱が立っているが、当該場所は地図では標高460mである。なお470mは「万葉展望台」の東側に位置する藤本山のピークである。

- (26) 註3に同じ。
- (27) これまで有力視されてきたミハ山は標高213mで、標高約122mに所在する伝飛鳥板蓋宮跡との比高差は約91mである。また、標高約130mに所在する島庄遺跡（草壁皇子の嶋宮に比定）との比高差は約83mである。この点においてもミハ山は目立たない。なお岸俊男氏は註10・1971年の論文でミハ山の標高を216mと記している。後続するミハ山説はこの数値を引用して論じられている。ただ、国土地理院昭和46年測量の国土基本図では、ミハ山の西展望台と思われる位置に標高213m（より詳細な地図では212.8m）を示す三角点が明示されていて、同地図では、これより高い等高線を見出すことが出来ない。岸氏による標高216mの記述が気に掛かるが、ここでは現地確認が可能な「標高213m」を用いて説明した。
- (28) 堀井甚一郎「交通」『明日香村史 下巻』明日香村史刊行会 1974年、78頁
- (29) 註9、63頁
- (30) 註17、46頁
- (31) 酒井龍一「第1章 推古朝の都市計画の復原—斑鳩と飛鳥を結ぶ太子道—」『奈良大ブックレット03 飛鳥と斑鳩』ナカニシヤ出版 2013年、5～16頁。
- (32) 註16、49～50頁
- (33) 註17、96～106頁
- (34) 相原嘉之「(29) 1998-28次 川原亀石遺跡の調査」『明日香村遺跡調査概報 平成10年度』明日香村教育委員会 2000年、78～81頁
- (35) 註16、170～171頁
- (36) 小島憲之、木下正俊、東野治之校注・訳『新編日本古典文学全集6 萬葉集①』小学館 2006年、201頁頭注
- (37) 註9、54頁。
- (38) 小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守校注・訳『新編日本古典文学全集4 日本書紀③』小学館 2006年、365～366頁。なお折口信夫門下の石上堅氏は、「山に這入ってはならぬヤマイビ（山忌日）なる日が、毎月の三日、正・五・九月の十六日などと定められており、強いて這入りこむと、木から血が出るのを見たり、山の神に立ち木として数えこまれてしまうなど、不思議を説く山の忌みも、神降りたもう山ゆえの古来の印象なのである」としている（石上堅『新・古代研究』雪華社 1971年、23頁）。毎月の3日が山忌日であるとする由来がどの地域で何時の頃の伝承かは不明であるが、事件が11月3日に起ったとされているのに山忌日が重なっているとすれば面白い。備忘として記しておきたい。
- (39) 註16、121頁
- (40) 三宅和朗『時間の古代史—霊鬼の夜、秩序の昼—』吉川弘文館 2010年、45頁
- (41) 多田一臣「魂逢のとき—万葉人の夜—」『万葉集I』若草書房 1998年、75頁